

グローバルスタンダードに向けての国際理解教育システム構築のための実地調査

－短期留学国際プログラム〈受け入れ・派遣〉を中心として－

四方田 千恵
丸山 千歌
長谷川 健治

【キーワード】 国際理解教育システム構築 受け入れ・派遣体制の充実・整備
地域国際交流と連携した留学生支援体制 教育交流・学術交流・支援文化交流の一体化

0. はじめに

執筆者3名および留学生課短期留学生係長水谷美由紀は平成16年3月29日～平成16年4月5日、文部科学省平成15年新世紀国際交流プロジェクトの助成を受け、本校の協定校であるカリフォルニア州立大学サクラメント校（アメリカ・サクラメント）、サンディエゴ州立大学（アメリカ・サンディエゴ）、さらには留学先進校と言いき Stanford 大学（アメリカ・スタンフォード）に実地調査に赴いた。調査の目的は大学全体の国際化推進に結びつける国際理解教育システムの構築を目指し、取り組みつつある①大学全体の国際化推進に結びつける国際理解教育の充実、②留学生支援体制の整備、学内国際交流の充実及び地域国際交流等への社会貢献の促進、③日本人学生派遣及び留学生受け入れコーディネイト体制の充実・整備、の3点の課題について、より有益な対応をするためである。

また、アメリカでの調査を有効なものとするために、出発前には以下の事前準備を行った。

① 情報収集

- i. 横浜国立大学、短期留学国際プログラム〈受け入れ・派遣〉コーディネーターおよび事務担当者へのインタビュー
- ii. 短期留学後の日本人帰国留学生と留学予定学生との座談会の実施
- iii. 短期留学後の日本人帰国留学生へのアンケートの実施

② 関連実施調査報告書の収集

- ③ 情報収集に基づき質問項目リスト作成
- ④ 訪問校コーディネーターへの連絡

以下、簡単に活動報告を行う。

1. カリフォルニア州立大学サクラメント校 (CSUS) での調査結果

① Office of Global Education (OGE)

カリフォルニア州立大学サクラメント校 (CSUS) は横浜国立大学の交流協定校であり2001年より延べ4名の学生を本学に派遣、また本学からは6名の日本人学生をCSUSに派遣している。CSUSにおいてこうした留学生受け入れ・派遣事業 (スタディアブロード・コーディネーション) を主に担当しているのがOffice of Global Education (OGE) である。今回OGEにおいて所長のJack Godwin氏、コーディネーターのMonica Freeman氏、アドバイザーのJanis Silvers氏と会い、留学生受け入れ・派遣事業 (スタディアブロード・コーディネーション) の管理運営の実情調査および意見交換を行った。

その概要は以下の通りである。

CSUSの派遣留学生の推薦の流れが以下の通りであることが明らかになった。

1. Monica FreemanとJanis Silversが学部の教官と連絡を取りながら行う。
2. 派遣候補生はJanis Silvers に3ページにおよぶ応募書類、2通の教官による推薦状 (内1通は東アジア研究・日本語部門から) と成績証明書を提出する。
3. 応募書類の提出期限は、秋学期の留学希望の学生については3月1日、春学期留学希望の学生については10月1日までである。
4. 応募書類締切の後、交換留学生選考委員会によるインタビューが実施される。

横浜国大からの派遣学生について、TOEFLの基準をよりフレキシブルに考えることは出来ないかと打診したところ、これはカリフォルニア州のルールであるため変更の余地がないことが明らかになった。

横浜国大の学生のCSUSにおける履修可能な科目については、学生の専攻の分野に関する授業を全履修科目の最低半分を履修しなければならない。

残りの半分の授業については、“American Studies”という非常に広い分野から選ぶため、ほぼ自由である。

② Language Skills Centerにおけるアカデミックイングリッシュ教育システム
入学要件となるTOEFLのスコアをクリアし、CSUSに入学が認められた学生に対する英語教育機関である。有料で実施する英語教育機関（Language Center）とは異なり、大学に在籍する学生に対し無料で提供される教育サービスである。CSUSには、4年次への進級条件にEnglish Proficiency Test（主にWriting）があり、English Language Instituteでの英語教育は、大学生として必要な英語力の養成し、学生生活を実りあるものにするための支援を行うという機能を持っている。

受け入れ時に実施するテストにより各学生の英語運用力のバランスを見て、技能別のクラスを受講させるシステムとなっている。この科目は卒業のための単位としては認定されないが、各学期の必要受講単位として認定される。例えば、本学からの今年度の留学生の場合は、今学期はReadingとOralのクラスを各1コマ受講しているとのことである。Oralは、主に発音矯正に重点を置いた内容とのことであった。

CSUS Language Skills Center サイト

<http://www.csus.edu/learningskills/>

③ 交換留学生選考委員会委員

交換留学生選考委員会のメンバーと会い、交換留学プログラムについて意見交換を行った。

JOYプログラムについて情報提供を行った上、CSUS側の現状については次のようなことが分かった。

- ・CSUSから学位を授与するには3年次にライティング・テストに合格しなければならない。3年次に留学する学生は留学する前にこの試験に合格しておく必要がある。
- ・CSUSの学生が日本に留学するためには、最低1学期の日本語授業を履修しておかなければならない。これは言語レベルの問題というよりも、学生の日本に留学するモチベーションを確認するためである。

- ・ CSUSの学生の多くは比較的貧しく、働きながら勉強している。そのため JASSOの奨学金は非常に重要である。アメリカ政府、州政府、財団などの奨学金もあるが、非常に競争率が高い。
- ・ JOYに参加している学生の単位はtransfer creditではなく、resident creditとして受け入れられる。これにより、CSUSの成績証明書にJOYの各授業の情報が明記されるため、内訳が明記されないtransfer credit のシステムより優れている。特に就職のとき有利である。
- ・ 交換人数のバランスについてはフレキシブルではあるが、外部評価があるため、長期的にはバランスがとれている必要がある。
- ・ JOY及び横浜国大の概要が、世界各国のCSUS提携校のそれとともにOffice of Global Educationで入手することが出来る。
- ・ 日本語初級レベルの学生を本学に留学させることが適当かどうか打診があった。本学の短期留学プログラムの趣旨と、日本語初級レベルの留学生に対する日本語教育環境が整備されていることを説明した。

④ 横浜国大からの派遣留学生

横浜国立大学からの派遣留学生としてCSUSに在学中の本学の学生2名に会い、短期交換留学をめぐる諸問題についてインタビューを行った結果、現在CSUSにおいて特に困っていることはないが、むしろ、帰国後の横浜国大における履修に関する連絡や単位互換についての連絡に不便を感じていることがわかった。

また、勉強面については英語による講義についていくのは容易ではないが、努力していること。ただ、Writingに関する準備をもっとするべきであったと思うが、アメリカの大学におけるようなレポートの書き方に関する授業は横浜国大では履修する機会がなかったことがわかった。

勉学面、生活面ともに問題があればOffice of Global EducationコーディネーターのMonica Freeman氏に相談して、問題解決を図っているようである。

⑤ 横浜国大での受け入れ予定留学生

CSUSの日本の協定校は2校（本学と早稲田大学）ある。14時15分からの学生との懇談会では、今年度4月に本学に短期留学プログラム生として留学予定の3名にインタビューを実施した。本インタビューは、本学への受け入

れ生に対するサービス向上を図るために、来日直前の学生がどのようなことを不安に思っているかなどについて質問をした。インタビューには、OGEのコーディネーターのMonica Freeman氏も同席された。

その結果、留学予定者は荷造り、資金準備などの渡日準備の他に、テキストの予習や、家族や友人との緊密なコミュニケーションを図る努力をしているとのことであった。現在不安に思っていることとして、日本語面では、言語習得への不安や、コミュニケーションがうまくできるかどうかを心配しているということ、経済面では、通学のための交通費を含む月あたりの生活費、学割システムの有無、銀行口座の開き方など、生活に関する具体的な質問が出た。メンタル面では、孤独に対する不安の声があった。

一方、大学で受講した歴史科目を通し、日本の高度経済成長、他地域とは異なる歴史的背景を知り、日本に対し深い関心を持っており、1年という短期間の滞在を有効に活用し、キャンパス内にとどまることなく、積極的に日本社会に触れたいという希望が強いこともわかった。

⑥ 学生寮その他の学内施設

当日11時よりOGEのコーディネーターのMonica Freeman氏と本学学生の案内で、キャンパス内を見学した。全体的には、原生植物の保護をはじめとする自然環境への配慮、施設を密集させないこと、高さのバランスをとること、施設保全を徹底し古びた印象を与えないことへの配慮によりキャンパス全体に広々と明るく感じさせるよう工夫しているのが印象的である。また施設の名称を地名で示す、卒業生アーティストに施設の壁画を依頼するなど、キャンパス作りへの工夫が多々見られる。

寮は個室、二人部屋、三人部屋など多様な部屋を提供している。トイレやシャワー、洗濯機などの衛生のための設備を共有スペースに設置し、ハウスキーパーをうまく機能させるという工夫により、より多くの部屋を提供している。学生の配置は、事前に生活習慣や音楽の趣味などについてのアンケートを実施し、マッチングを行う。寮の隣に寮の管理人専用の事務室がある。寮費は、食堂での食事回数の組み合わせで加減することができるようになっている。

2. サンディエゴ州立大学 (SDSU) での調査結果

① Office of International Programs

サンディエゴ州立大学 (SDSU) もまた横浜国立大学の交流協定校であり、交流協定の締結は遥か1978年にまで遡る。1999年からは延べ10名の学生を本学に派遣、また本学からは2名の日本人学生をSDSUに派遣している。SDSUにおいてこうした留学生受け入れ・派遣事業 (スタディアブロード・コーディネーション) を主に担当しているのがOffice of International Programsである。ちょうど今年度は交流協定更新の年に当たっていることもあり、国際交流プログラム担当の Alan Sweedler 教授、海外留学プログラム アシスタントディレクターのRobert Carolin氏、コーディネーターのAlex Hidalgo氏と、協定更新に際しての文言の確認、留学生受け入れ・派遣事業 (スタディアブロード・コーディネーション) の管理運営の実情・ニーズ調査等を行った。

その概要は以下の通りである。

協定更新の要求は概ね受け入れられた。横浜国大の協定の参加部局が拡大したことについては、SDSUからの派遣の可能性が増したということで歓迎された。各年度の交換人数の上限を2名から3名に改めることを提案したところ、4名にすることがSDSU側から提案され、4名で改定手続きを進めることで了承された。

JASSO奨学金は、CSUSと同様に非常に重要視されている。UMAPに参加することによってJASSOの奨学金の枠が多く獲得できる可能性があることを伝えたところ、SDSUでは以前UMAPを検討したときに問題があるとされたが、今後再検討される可能性がある。

② American Language Instituteにおけるアカデミックイングリッシュ教育システム

SDSU附属の英語教育機関であるAmerican Language Institute(ALI)においてDirectorのMichael Hoffman氏に同研究所が提供しているアカデミックイングリッシュ教育システムについてインタビューした。その結果、ALIは① English for Academic Purposes (EAP) ② Intensive English Communications (IEC) ③ Certificate Programs ④ Teacher Training ⑤ Customized Programs for

Groups 5種類の教育プログラムを提供していること、なお、すべての教育プログラムは有料であり、各学期の学生数に応じてクラス数の増減が可能であることがわかった。

また、開講時期は各プログラムによって異なるが、①のEAPの場合、18週コースが1月上旬、17週コースが8月下旬、12週コースが5月下旬に開講される。また、TOEFLのための3～4週間の集中コースも12月、7月に開講されるなど、柔軟性に富んだ、多様な受講が可能なシステムとなっている。

さらに、施設についてはALIはSDSUのキャンパス内にLanguage Lab、Computer Lab を完備した専用の教育棟を所有しているが、来年度からは新しい教育棟がオープンする予定であること。学生はSDSUの学生寮に入寮可能であることなどがわかった。

③ 交換留学選考委員会

日本語プログラムの責任者であり、交換留学選考委員会の代表である日暮嘉子教授をはじめとする5名の選考委員会メンバーに昼食時を利用して会い、交換留学生選考に関する意見交換を行った。

結果、横浜国大は11校あるSDSUの日本側交流協定校の中でも最も人気の高い大学であることがわかった。もっとも、それは横浜という地理的条件に寄るところが大きいらしい。学生の選考に当たっては選考委員会が最も重視しているのは面接によって窺われる人柄及び留学への明確な動機などであることもわかった。

また、学生にはホームステイへのニーズがあることもわかった。この問題についてはサンディエゴと横浜が姉妹都市であることを利用して、横浜市との協力を得られるのではないかという提言があった。

SDSUでは日暮教授が中心となって定期的に日本への留学説明会を開催していることがわかった。日本語教育プログラムでは日暮嘉子教授によるSDSUの日本語学習者のための日本語教育教材が初級から上級にわたって開発されていることがわかった。

日暮教授からは日本語上級レベルの留学生の送りだしについての打診があり、本学に上級レベルの日本語学習者のための日本語教育環境が整備されていることを説明した。

④ 横浜国大からの派遣留学生

横浜国立大学からの派遣留学生としてSDSUに在学中である本学の学生に会い、短期交換留学をめぐる諸問題についてインタビューを行った結果、特に困っていることはないが、困ったときはまず、ボランティアグループに相談し、わからない場合は、Office of International ProgramのYvette Randallさんに相談することができることがわかった。

留学生向けの授業は特にはないが、英語のwritingだけは留学生対象の授業がある。(30人くらいのクラス) 英語では、communicationのクラスが留学生に人気であることがわかった。

生活面では、車を持っていないので、不便であるが、来年にはキャンパス内に駅ができるのでだいぶ便利になるであろうとのことである。寮に「ついては、現在2LDKのアパート形式のInternational House (留学生用寮)に住んでいる。これは4人部屋である。このInternational Houseには80室くらいある。大学の中に寮は6棟あり、そのうち1棟は最近できたが、寮費が高いのとMeal Planがついていて食事の選択幅が狭いので、あまり人気がないとのことであった。

⑤ 横浜国大での受け入れ予定留学生

本学に今年度10月および来年度4月に留学予定の二名と面談した。両者ともに、日本での就職を射程に入れつつ、日本への留学を決めたということである。横浜を希望する理由は、首都へのアクセスのよさと、環境の良さ、横浜の知名度の高さである。

⑥ 学内施設

当日13時よりSDSU大学院生の彦坂芳宏氏、学部生のデュバン直美氏と本学の学生の案内で、キャンパス内を見学した。広大な敷地に大きな歩道を敷設、大きな施設を配置したキャンパスに、熱帯植物を植栽として活用するなど、のびやかでかつ活動的な雰囲気を出す工夫が随所に見られる。

図書館は新館を増築し、6,400,000万点以上の資料(書籍のほかにマイクロフィルムを含む)がある。多くの図書館に見られる研究用の机といすだけでなく、書庫や階段のそばなどに多くのソファが設置され、自宅のような感覚で図書館を利用できる環境を創出している。平日は24時間開館している。

⑦ 国際戦略

日暮教授の紹介により、ナンシー・マーリン副学長、ポール・ウォン人文学部長、ジェフリー・キャプランアジア言語学科長に会い、SDSUが国際戦略の一環としての交流協定事業を重要視していることがわかった。

ナンシー・マーリン副学長は着任以来、SDSUの国際化を強力に推進してきている。マーリン副学長は博士号を取得し、University of Northern Iowaで副学長として勤めている時にスペイン語をマスターしており、外国語教育と国際教育に非常に熱心である。マーリン副学長のリーダーシップの下でSDSUからの派遣留学生は過去5年間で300%以上、受入留学生は150%以上増えている。国際交流が最も急激に増加しているのはメキシコ・ラテンアメリカであるが、アジアでは横浜国大が最も人気のある大学の1つであるため、交流協定を拡大することを歓迎した。

3. スタンフォード大学Bechtel International Centerでの調査結果

① Foreign Scholars Advisor

Bechtel International Centerとは、Stanford Universityにおける留学生の受入及び派遣業務の中心的機関である。同センターのForeign Scholars AdvisorであるBrian Groves氏に会い、同センターにおける留学生への支援事業の管理運営の実情を調査すると同時に同センター施設を見学した。

Bechtelには14人の常勤スタッフがいる。Visa関係の業務に多くの労力を割いている。また、Stanfordに到着してからのサポート体制も充実している。1月に1度の国際イベントを行うことを目標としている。特にThanksgiving Dinnerなどメジャーなイベントには多くの留学生が集まる。そのほか、Friday Morning Coffee for Familiesなど、定期的に学生とその家族たちが集まるためのインフォーマルな場を提供している。

Overseas Resource Centerでは、留学プログラムの資料が国別に整理されて提供されている。Fulbrightなどの留学のための奨学金についての情報、過去成功した申請書などを閲覧できる。日本の高校で英語を教えるJETプログラムの情報なども備えてある。

② 学生支援ボランティア

Bechtel International Center にはボランティアスタッフによって運営されているCommunity Committee for International Students(CCIS) と International Family Services のプログラムがある。Dee Gustavson氏をはじめとする4人のボランティアスタッフへのインタビューから以下のようなことがわかった。

1) Community Committee for International Students(CCIS)

CCISは50年の歴史を持つボランティアグループである。新聞のコラムなどを利用しつつ徐々にその知名度を高め、現在では600名がメーリングリストに名を連ね、うち約400名ほどがスタンフォード在学中の留学生・研究員のためのボランティア活動に携わっている。会員は1年に25ドルを寄付し、活動に参加する。

主な活動はEnglish-in Action と呼ばれるものであり、300名ほどのボランティアが参加している。English-in Actionは1対1で英会話の相手をするのみならず、郵便局・銀行に連れていくなど留学生が地域コミュニティに溶け込んで順調な日常生活を送るための手助けもする。English-in Actionに携わるボランティアは特に英語教育に関する特別な知識は求められない。500人ほどの希望者に対し、4人のボランティアスタッフが会員とのマッチングを行う。Bechtel International Center にはボランティアスタッフのための部屋（電話・パソコン付き）が提供されている。但し、電話代などはCCISの予算から払うことになっている。

新しく渡米した留学生・研究者のために、短期ホームステイ・プログラム（3～5泊）をコーディネートし、生活用品を貸出するローン・クローゼット（\$10払い、帰国するときに返却・寄付するというシステム）を提供している。その他随時、ランチ会、ディナープログラム、ピクニックなどが催される。

こうしたCCISプログラム維持における最大の困難は、会員の維持および新会員の獲得である。

2) International Family Services

International Family Services は主に留学生・研究員の家族を対象とした支援プログラムである。数々の活動の機会が提供され、様々な人々との交流の場

となる。

英語・スペイン語・フランス語・ドイツ語・ポルトガル語・中国語などの語学の授業の他、各国のダンスや料理、手芸などのクラスが無料で開講される。留学生の家族はこれらのクラスを受講するだけでなく、自ら開講したり、様々な企画を立て、実行することもできる。

また、Wednesday Tourと呼ばれる毎週水曜日に、何台かの車に分乗して、日帰りで近場の観光地に行ったり、何か施設の見学に行ったりするプログラムや、Friday Morning Coffee と呼ばれる金曜午前中のフリートークの場などのプログラムもある。ここでは育児や、日常の問題点などについて盛んに情報交換が行われている。

なお留学生の家族には大学から、courtesy card という学生証が発行され、学内の図書館やスポーツ施設などが無料で利用できる。

4. 調査成果と今後の課題

以上の実地調査から以下のような成果を得ることができた。

① 大学における国際化推進の方策としての短期留学国際プログラムの有効性について

まず、今回の訪問先は本学の交流協定校であるカリフォルニア州立大学サクラメント校(CSUS)、サンディエゴ州立大学 (SDSU) である為、一番の目的は両校が本学との短期交換留学プログラムに対し、どのような意見を持っているか、ということを確認することにあつた。幸い、両校ともに本学との短期交換留学プログラムに概ね満足しており、今後も同プログラムの継続と発展を希望していることが確認できたことは大きな成果であった。

本学が平成9 (1997) 年より取り組んでいる短期留学国際プログラムは、大学における国際化推進の方策として発展性を持つ、有効なプログラムであることを再認識すると同時に、よりグローバルスタンダード化を進め、国際理解教育を充実させて行くべく、様々な刺激を受けたことは今回の実地調査における最も大きな成果であろう。

特に、本学の短期留学国際プログラムの教育プログラム (国際交流科目) は英語による専門科目と日本語教育の2部構成になっている。日本語教育においては初級から上級までの6レベルに対応可能な体制が準備されていると

同時に、日本語上級者は学部開講の日本語による専門科目を受講することも可能である。つまり、日本語学習が障害にならない短期国際プログラムとしての性格を保ちつつも、より高度の日本語学習・日本研究を望む協定校のニーズにも応じられる、全方位的プログラムを提供しているのである。

こうした特質を持つ本学の短期留学国際プログラムは、さまざまな協定校の多様なニーズに柔軟に応じることのできる、競争力を持ったプログラムであることを再認識し、今後も一層この方向性を推進していく必要を感じた。

② 受け入れ・派遣コーディネート体制の充実・整備について

1) インターナショナル・オフィスの管理運営

今回訪問した協定校において留学生受け入れ・派遣コーディネートを担っているのは CSUSではOffice of Global Education (OGE)、SDSUではOffice of International Programs と呼ばれる機関（インターナショナル・オフィス）である。それぞれ留学生受け入れ・派遣事業（スタディアブロード・コーディネーション）を行うための独立した機関があり、複数名の専任スタッフと事務所を持っている。

今回は協定校への訪問であったため、個々の事項に関する意見交換が中心となり、組織のあり方についてはあまり多くのことは知り得なかったが、博士号を持つ専任スタッフが、企画立案をも含めてかなりの権限を持ちつつスタディアブロード・コーディネーションを一元的に管理運営しているという印象が強かった。

CSUSおよびSDUSの間にも若干の違いがあるようであり、おそらく各大学の個性によってインターナショナル・オフィスのあり方も一様ではないと思われるが、一貫性を持った国際化推進のためにはある種の見識と権限を持ってスタディアブロード・コーディネーションを一元的に行う組織がいずれ必要になるのではないだろうか。

これら2校のみならず、その他多くの大学における組織運営のあり方について今後も継続調査できればと強く感じた。

2) アカデミック・イングリッシュの教育システムについて

語学力が留学成功の大きな鍵であることは言うまでもあるまい。その点、留学先進国であるアメリカにおける留学生のための英語教育（アカデミック

イングリッシュ)の整備・充実は日本に比べて一日の長があると感じた。

まず、すでに大学に入った学生のためにはCSUSにおけるLanguage Skills Centerのように在籍学生に対し無料で提供される教育サービスがある。また、大学入学前の学生に対してはSDSUにおけるAmerican Language Institute(ALI)のような大学附属の有料教育機関が完備されている。

横浜国大にも留学生センターが設置され、学部生に対する日本語教育および学部・大学院入学前予備教育生に対する日本語教育を一元的に行っている。が、いずれも無料で提供される教育サービスであり、財源は大学の予算に負うものである。そのため学生数の増大やニーズの多様化に予算措置が追いつかず、その負担が学生や教員にかかっているのが実状である。

現時点では学生規模や経営システムの相違もあり、単純な導入が図れないことは自明だが、示唆を受けるところ大であった。

3) 情報および事務手続きのIT化について

本学からの派遣留学生にとっての問題は、帰国後スムーズな単位互換が行われ、卒業等に影響しないか、ということ、海外からはWeb上における履修手続きができないため代理人による履修を行わなければならないこと等、本学側のシステムに関することが多いことがインタビューによりわかった。

また、本学で受け入れ後アメリカに帰国した学生の単位互換をスムーズに行うためには、本学で開講している授業に関するより詳細なシラバスの開示が必要であることがわかった。

つまり、アメリカにおいてはWeb上における教育内容の情報開示および履修手続き等が自明のことであり、こうした教育IT化に対する日米の温度差がスムーズに交換留学を行う際の障壁となっていることがわかった。

本学においても着手し始めているハード・ソフト両面からのIT化を、より強力で推進する必要があるだろう。

③ 地域国際交流と連携した留学生支援体制について

スタンフォード大学のBechtel International Centerを訪れて驚いたことは、大学の正規スタッフとボランティアスタッフが強い連携のもとに留学生支援体制を構築していることであった。それは設立以来50年の歴史を持つボランティアグループCommunity Committee for International Students(CCIS)の存在があ

ってこそ実現できることであり、直ちにこうした関係を築くことは容易ではない。さらに、ボランティア活動そのものに対する日米の土壌の相違も考慮しなければならないことは当然である。

しかし、そうした条件の相違を差し引くとしても、地域国際交流と連携した留学生支援体制の一つのモデルとしてスタンフォード大学Bechtel International CenterにおけるCommunity Committee for International Students(CCIS)のあり方には得るものが大きかった。今後、横浜国立大学の実状に合わせた形での導入を提言していきたい。

④ 教育交流・学術交流・支援文化交流が一体化した留学生センターの利点について

本学留学生センターは「教育交流」「学術交流」「支援・文化交流」の3本の柱のもとに9名の専任教員が留学生課や各部局と連携を取りつつ、約900名の本学留学生の教育を推進している。

今回の調査で確認したのは、教育・研究・支援活動が分離することなく、互いに連携を取りつつ有機的に留学生教育を推進していける現体制の利点であった。こうした特長を生かしつつ、各活動を質・量ともに拡充していくためには何が必要か、ということを経験した知見をもとに、提案していければと考える。

なお、今回は実施決定から実施までの期間が短く、先方とのアポイントメントを取るのに苦労した関係で、共同研究の可能性についての詳しい議論はできなかった。今後継続調査できればと思う。

全体を通して、グローバルスタンダードに向けての国際理解教育システム構築への多くの示唆を得ることができ、非常に充実した、有益な調査であった。これらの示唆を本学の実状との調整を図りつつ、有効に実現していきたいと考える。